

## 論文 個人からエスニシティを問う : 実践としてのエスニシティを分析する視角

著者	井上 恵子
雑誌名	社会学ジャーナル
巻	45
ページ	41-53
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00159855">http://hdl.handle.net/2241/00159855</a>

# 個人からエスニシティを問う

——実践としてのエスニシティを分析する視角——

井上恵子

## Abstract

The purpose of this paper is to review the analytical perspective on ethnicity. Especially we will focus on the individuals. This paper begins by examining and reviewing Kohei Kawabata's study. He focused on the daily practice of zainichi Koreans who lives in suburban. After reviewing Kawabata's study we will review Hong-Jang Lee's study. He examined about the category of zainichi Korean and clarified the importance of story of individuals when we think about the ethnicity.

In many literatures, ethnicity is thought as substantial group. However, according to Rogers Brubaker, thinking of ethnicity, race, and nation are not in terms of substantial groups or entities but in terms of practical categories. In this study, following Brubaker's study, the ethnicity is seen as a category which people uses in specific moment. By doing so, it can be possible to analyze the processes of how they practice their ethnicity.

## 1. はじめに一なぜ個人の語りに注目するのか

筆者は「在日コリアン」にインタビューをし、そのインタビューをデータとして「在日コリアン」の研究をしてきた。その中で「在日コリアン」について語るということとはどのようなことを意味するのだろうかという疑問を抱くようになった。筆者がインタビューをした人たちはそれぞれが今まで生きてきた中で経験したことや親や友人からきいた話、思うことを語ってくれたが、それは必ずしもエスニシティに関するものだけではなかった。

「在日コリアン」たちは当たり前のことではあるがそれぞれ多様な生を営んでいる。日本で生まれ日本で育った3世、祖母が在日コリアンであるという日本国籍の人、在日コリアンの母、コリアンアメリカンの父をもち、アメリカで生まれ日本に移住し、アメリカに再移住した人、海外留学経験者や、国際的な移動をしながら「在日コリアン」として生きている人もいる。このような様々な経験をした「在日コリアン」に出会い、彼・彼女らの「在日コリアン」として生きるリア

リティを描き出すための分析視角が必要だと感じるようになった。

筆者は研究を始めた当初、語りの多くがエスニックなことに対する語りではないことに対し、自らのインタビューのスキルのなさを嘆いたり、時にはインタビューに答えてくれている人に失礼だと思いつつも、なんでこんな雑談が多いのだろうというちょっとした不満を抱いたりもした（インタビュー中ではなく、分析中のことではあるが）。手元にある語りをどのように分析すればいいのか。彼らの語りはとても面白い。ではどうしたらこの面白い語りをエスニシティ研究のデータとして利用できるのかと悩んだ。そしてある日思ったことは、私は彼らの語りを「在日」という分析カテゴリー、つまり、筆者が研究者として学んだ「在日」というレンズを通してのみ解読しようとしていたのではないか、彼らの語りが面白いのは彼らが自らの人生を真摯に語ってくれているからであり、つまりそれは彼らの経験はエスニシティというレンズだけでは分析しきれないのではないか、ということである。

例えば、筆者がデータとしてどのように位置づけるか非常に困難を感じていたある青年の「さみしい」「彼女が欲しい」という繰り返し語られるテーマは、インタビュー時の彼にとっては非常に重要な意味を持つ切実な思いであり、その思いはエスニシティという分析カテゴリーで分析しきれないものではないが、それを含めた個人の人生を丁寧に検討していくことこそが重要なものなのではないかと考えるようになった。

筆者は「在日コリアン」のエスニシティの研究、「在日コリアン」として、そして在日としても生きるとはどういうことなのかという問いを明らかにするための研究をしている。それと同時に、個人と社会のつながりを明らかにすることも目的としている。「在日コリアン」を生きる人々がそれぞれの人生を語るとき、どのような経験がエスニシティの枠組みを用いて語られ、どのような経験や思いがそうではない位置づけをされているのか、その双方を描き出すことにより現在の社会の中で「エスニシティ」がどのようにたちあられ経験されるのか、そしてそれぞれが身を置く環境や社会、ライフステージの変化によってそれがどのように変化するのがあるいはしないのかということをより立体的に描きだしたいと考えている。

以上の背景のもと、本稿では在日コリアンのエスニシティについて考えていくとき「個人」という視点がどのように用いられてきたのか、どのような視点から「個人」におけるエスニシティを読み解いていけるのかをレビューしていく。まず、「個人」という視点から在日コリアンのエスニシティや共同体の在り方について考察を行った川端浩平（2013）、李洪章（2016）の研究のレビューを通じ、在日コリアンのエスニシティ研究における「個人」という視点の重要性を明らかにする。そのうえで、彼らの研究で触れられてこなかった部分について言及し、その課題を乗り越えるための分析視角としてロジャース・ブルーベイカーの議論をレビュー、検討する。彼の提唱した、エスニシティへの認知的視座という分析

視角を援用し、在日コリアンのエスニシティを見つめた時、どのようなものが見えてくるのかということをも明らかにする。そのうえで個人を出発点とし彼らの日常実践や経験の解釈などに焦点を当て、エスニシティを描き出すための分析視角の有効性について検討をしていく。

## 2. 個人化した社会におけるエスニシティ—実践への注目

在日コリアンのエスニシティについての研究は多くの蓄積がある。その中で、「エスニシティ」という用語は様々な意味で使われている。エスニックアイデンティティ、民族集団、「民族」、民族的な実践、さらにはアイデンティティそのものを意味するものとしても使われてきた。原初主義的なアプローチ、すなわちエスニシティは所与のものであり変えることができないものであるという意味で用いられることもあれば、構築主義的なアプローチで用いられる場合もある。ゆえにそれぞれの研究においてエスニシティがどのように使われているのかを検討する必要がある。本節ではエスニシティの概念それ自体のレビューではなく、「個人」という視点から在日コリアンのエスニシティの在り方や開かれた共同体の在り方について論じた、川端浩平、李洪章の研究を取り上げ、検討していく。

川端浩平は、在日コリアンの集住地が解体され、スティグマから解放された岡山県の郊外にそのフィールドを定め、そこに住む在日コリアンへの聞き取り調査を行い、若い世代の在日が「個人化」している状況の中での問題点を指摘した(川端 2013)。彼は、個人化をうながしている一つ目のベクトルとして「従来のエスニック共同体における結びつきの希薄化という歴史的過程」という要因をあげている。そして、二つ目の要因として新自由主義という政府の謳う近年の政策がこの一つ目のベクトルと結びつくことにより「エスニックな帰属の問題や葛藤をあくまで諸個人の問題＝自己責任として解決することを推奨する」ようになってしまうと述べる。このような社会的な状況の中で不可視化された存在になっている在日コリアンを彼は友人の造語である「隠れ在日」という言葉で説明する。『『隠れ在日』とは、家族や親戚以外との在日との関係性はなく、孤立した環境において生活する中で、自分自身の帰属感覚に向き合っている在日の若者である。既存の民族団体が掲げる一枚岩のエスニックアイデンティティでもない、自分自身のエスニシティを力強く掲げることにも多少の躊躇を覚えてしまうような在日の姿』であり、川端はこのような若い世代の在日コリアンたちの日常実践に注目し次のように論じている。「日常実践は、日々の生活の中で、その場の状況に応じて即興的に紡がれていくものである。そこに全体を見渡すような俯瞰的な視点や、しっかりと練られた戦略は存在しない。在日にとってのエスニシティの形成とは、そのような日々の日常実践を通じて遂行されるのであり、アイデンティティ政治が志向する戦略的なものとは異なる位相で営まれている」。この川端の議論においてエスニシティは「日常実践を通じて遂行」されるものであり、

言いかえれば、エスニシティは少なくともその実践を行う個人にとってはリアリティを持つものであり、自らの存在の一部をなすものであるということが出来る。

川端はこれらの日常の実践について、アイデンティティ政治を通じた戦略的なエスニシティの在り方ではなく、マジョリティと共に生活する中で確固とした戦略を練る居場所を持つことが不可能な状態において遂行される戦術的な営み（川端 2013:190）とし、戦術と戦略という二つの言葉を用いそれらは相互補的なものであると主張する。ここでいう戦略的なものとはアイデンティティ政治が掲げるような何らかの目的を持った全体を見渡すような俯瞰的な視点であり、戦術的なものとは日常生活の中で即興的に紡がれていくその場その場での機会の捉え方とされている。

川端の研究は不可視化された状況を生きる在日コリアンのエスニシティの在り方を明らかにした。それは、個人的な領域の中でエスニシティを希求しながら生きている姿である。川端が描き出したのは日本で生活をし、集住地の解体に伴い在日コリアンの共同体が解体され、自分が在日だということを知りながらも、果たしてそのことが何を意味するのかについてお互いに確認しあう契機（川端 2013:192）が限られ、エスニシティを確認する作業は、家族や諸個人の内面といった領域に限定され（川端 2013:192）ているという状況を生きる個人の姿である。

これらの議論では、在日コリアンのエスニシティが、その場その場の機会をとらえながら、即興的に紡がれていく戦術としてではあるものの、「希求」されるものであり、「確認される」ものとして表現されている。もちろん、当事者にとってはそのように感じられるものではあるだろう。しかし、エスニシティそれ自体が実践を通じて達成されるものであるのだとしたら、その実践がどのような状況で達成され、どのような状況で発生し、どのような現象がエスニシティとして彼らに理解されているのかを詳細に見ていく必要がある。また、川端の議論では在日コリアンを生きる当事者のエスニシティを「希求」する姿や構造的差別の中での在日の姿に焦点が当たっている。ゆえにそれ以外の部分、つまり在日コリアンとしても生きている、個人の人生の中でどのような時にエスニシティが前景化するのか、そしてそれが前景化するとき、どのような事象が「在日コリアン」というカテゴリーを用いて理解され、そのカテゴリーを用いてどのように世界を理解しているのかという部分については十分に議論されているとはいえない。

さらに、川端の問題意識は在日コリアンのアイデンティティ政治の弱体化にあるため、日本人社会において個人化した状況を生きる「在日コリアン」の日常の実践が分析されている。言いかえると、日本社会における構造的差別の存在を前提に議論が行われているのである。これらは、在日コリアンが今もなお直面している現実在即してみれば、非常に重要な論点である。しかし、在日コリアンもまた国境を越えた移動をし、「日本人」以外の多様な人々と直接、あるいは間接的にかかわりを持ちながら生きている。また、在日コリアンとして自らを認識した

り、他者に認識されたりする人々の中には、ダブルやクォーターといわれる、日本人/在日コリアンといった二項対立的な図式に当てはまらない人々もたくさん存在している。このような社会の変化や移動の経験は、在日コリアンというカテゴリーの理解、実践に少なくない影響を与えていることが予想される。このような状況をかんがみると、マイノリティのアイデンティティ政治が弱体化した中で、構造的差別にさらされているエスニック集団に帰属する存在としての在日コリアンの姿のみならず、一人の個人を出発点とし、社会移動や物理的な移動を含めた個人によるエスニシティの実践/非実践をより詳しく見ていく視点が必要になる。

### 3. 研究者による「カテゴリーの罫」から対話的關係へ—個人への着目

分析者による「カテゴリー」をいったん括弧にくくり、個人の語りに注目するエスニシティ研究として李洪章（2016）の研究があげられる。李は個人の語りに注目するきっかけとして被調査者との出会いによる〈私〉の「当事者」としてのポジショナリティの揺らぎを挙げている。李は研究を始めた当初の「当事者」としてのポジショナリティを以下のように述べている。

「性自認が男性で、性別に違和感を持たず、異性愛を指向し、長男であり、民族教育経験があり、民族組織とのつながりを持ち、配偶者が同じ韓国籍の在日朝鮮人である、といった立場にあるからこそ、〈私〉の生は「安定」的なのである。つまり、〈私〉は、在日朝鮮人社会内部においては、支配的な立場にある、いわば「正当」な在日朝鮮人であるということだ。（李 2016: 58）。

しかし、彼は「ダブル」と呼ばれる日本と朝鮮半島双方にルーツを持つ「在日朝鮮人」との出会いを通して、歴史的な文脈、つまり加害者としての「日本人」、被害者としての「在日朝鮮人」という被害性を基礎とする「当事者」カテゴリーに「ダブル」を当てはめてとらえようとしていた自分自身に気付いたという。その土台には「ダブル」を調査対象としている以上はその異種混雑性の中身を明らかにしなければならないという問題意識に加え、「在日朝鮮人」カテゴリーの権力性を問いながらも、やはりその歴史的被害性を無化するわけにはいかないという焦りと切迫感があつた（李 2016:194）と述べている。そして、以下のように「当事者」としての〈私〉のポジショナリティの問題点を指摘する。

「当事者」という用語は、ある問題の影響・被害を直接的に受けている人々を指して用いられるのが一般的だろう。しかし、その「当事者」という考え方には、二つの問題が含まれている。まず、「当事者」カテ

リーに甘んじることによって、自らが他者を差別し抑圧する可能性を不問に付してしまう点である。言い換えれば、カテゴリー内部の多様性を隠蔽し、そこに潜む権力関係との無関係を装ってしまうのである。もう一つは、異なる立場にある人々を「当事者」として一括りにすることで、「当事者意識の強弱」という価値基準が持ち込まれてしまう問題である（李 2016:63-64）。

李はこのような自らの立場性への気づきから「個人に依拠したスタンスを目指し」その姿勢を「インフォーマントの語りを記述していく際に、特定のカテゴリーに依拠する〈私〉が、自らの価値基準をできるだけ持ち込まないための姿勢である」（李 2016: 70-71）と位置付けている。

民族性の強弱、血統、国籍などではメンバーシップを定義せず、しかし在日コリアンの持つ歴史性は共有するというような「集団」の外延の拡張を前提とした「在日コリアン」観からは一定の距離を置き、「生活者」としての個人の「民族実践」に注目する必要があるという李の問題提起は示唆に富んでいる。李の議論は「在日朝鮮人とは誰か」から出発し、日本国籍取得者や日本名を名乗る人々や、運動に参加しない（できなかった）人々、「ダブル」をその枠組みに入れることで「在日コリアン」カテゴリーの範囲をひろげていくような議論ではない。李は自らの視点の変化について以下のように述べている。

〈私〉が「ダブル」に着目するようになったのは、〈私〉がかつて無批判に依拠し続けてきた「在日朝鮮人」というカテゴリーが、実は「純血性」という虚構によって存立しているという事実を突きつける存在であったからだ。私にとって「ダブル」と向き合うことは、〈私〉自身の暴力性を自覚し、〈私〉によるカテゴリー化の権力行使に歯止めをかけるための一つの実践であった（李 2016:193）。

つまり、彼は当事者として「ダブル」に向き合うことにより自らの研究者としての分析カテゴリーの在り方を見直し、当事者によって実践されるカテゴリーに注目したのである。李は、「ダブル」である二人のインフォーマントが「ダブル」としての経験を共有したことについて、「里奈と直人が語り合う中で『ダブル』としての経験を共有したのは、決して『ダブル』というカテゴリーを作り出し、そこにとどまりながら共闘することを目的としたものではなく、自らが日常を生き抜くための『力を得るため』あるいは『回復するため』のものだった」（李 2016: 195）とし、このような語りが行き交うとき、それは日常に根差した、自発的な欲求と応答によって結びついた共同性が生まれることだろう（李 2016:195）と結論付けている。

いま・ここを生きている個人はどのように生きているのか、どのように生きて

きたのか、どのように生きていくのか、彼らが「在日コリアン」として生きるということはどういった時であり、エスニシティという社会に共有されたカテゴリーは彼ら個人にどのように作用するのか、そして、彼らがそのカテゴリーをどのように用い、解釈し、実践するのかを描き出すことが筆者の研究が目指すところである。李の個人の経験にまずは耳を傾けるというアプローチは、それぞれの人生を生きる人々のエスニシティの実践を当事者意識の強弱や民族意識の強弱による単線的な理解からではなく、人生それ自体から描き出すことを可能にしてくれる。それは研究者の「分析カテゴリー」ではなく、当事者の「実践カテゴリー」に注目しそこからエスニシティを描き出すということである。

李の議論は個人に立脚しているが、彼の問題意識は現在の在日朝鮮人社会にあり、その在日朝鮮人社会への「開かれた共同性」への提言にある。「在日朝鮮人」であることは在日朝鮮人社会に所属可能なメンバーシップであり、そこには集団としての「在日朝鮮人社会」が存在することが意味され、個人化が進み、在日コリアンを生きる個人とアクティビズムの間のギャップによる運動の弱体化や、共同体としての在日朝鮮人社会の在り方が難しくなっている現在において、いかに新しい連帯を構築するかが議論の中心になっている。「開かれた共同性」の再構築とは、在日朝鮮人のさまざまな「民族的現実」を、「私」のアイデンティティの一貫性を否定する要素として受け入れることによって開始される。そしてその試みによって生じる行き場のない不安を積極的に開示していくことによって、他者との間に対話的關係は開かれる。「開かれた共同性」は、特定のカテゴリーに不安の捌け口を求めるのではなく、自らの身を不安のスパイラルの中に置き続けることによってはじめて可能になるのである（李 2016:253）と李は述べる。李の提言はあくまで、あるべき在日朝鮮人像を提示し、それらのカテゴリーが含む「あるべき姿」はそのままにそのカテゴリーの境界を広げていこうとし、それがゆえに、連帯が難しくなってしまうという課題を抱えた在日朝鮮人社会に向けられたものであり、李自身もそのことには意識的である。

また、彼の議論は「在日朝鮮人は何かしらの形で『民族的現実』に拘束されている」（李 2016:236）という前提に立っており、それを支える一つの要因として「歴史性」という言葉が多用される。それは、植民地支配の時代から連なる在日朝鮮人の歴史であり、日本社会における被害者としての歴史である。もちろん、それらは言うまでもなく現在においても形を変えて継承されているものである。ヘイトスピーチや民族活動を行う団体への嫌がらせなどの目に見える形での差別も頻発している。それ以外にも、個人レベルでいつ自分が親世代のような差別にあうかといった不安感を抱えながら日常を送っている人もいる。筆者の在日の友人が「日本人と一緒にの実力なら、日本人のほうが選ばれるから、日本人よりもっと頑張りなさい」というような言葉を聞いて育ってきたのもその歴史性の継承の一つの例であるといえる。このような社会的状況を考えると、これらの問題をあくまで被害/加害という歴史性ととも継承されてきた枠組みを用い、そこに実



体的な集団性を見出し、集団として日本社会における差別と闘っていかねばならないという切実な思いは当然のものであるし、開かれた共同性の構築は必要不可欠なものである。

しかし、一方で複雑で多様な生を生きている一人一人の「在日コリアン」の人生はそこまで民族的現実にと拘束されているのかという疑問もある。もし、そのような前提に立ってしまったら、見えなくなってしまうものもあるのではないだろうか。

エスニシティそれ自体が「実践」であるとするのであれば、それが実践されやすい環境にいる場合(民族団体に所属している、あるいは、家族が活動家である、同じエスニシティを持つ人々とのかかわりが比較的濃厚な地域に住んでいるなど)は、意識する、せざるにかかわらず自らのエスニシティを実践する機会が多くあるだろう。なぜならば、そのような環境においてはエスニシティを実践することそれ自体がある集団への帰属意識を確かなものにするものであるからである。自分自身をエスニックな立場に置き、そこから自分自身のみならず自分自身のカテゴリーを語る機会も少なからずあるかもしれない。しかし、このような危機感や民族的現実へ焦点をしばると、物理的、社会的な移動やライフステージの変化などを含めた、「在日コリアン」を取り巻く環境の変化と、それらが「在日コリアン」というカテゴリーを用いて行う何らかの行動や物事の解釈の仕方などのような影響を与えているのかという時間軸とともに変化する個人の多様な生やそれに伴うエスニシティを認知する枠組みの変化が取りこぼされてしまうのではないだろうか。

集住地が解体され、在日コリアンコミュニティが弱体化し、家族以外の在日コリアンに会ったことがないという状況を生きる個人や、在日コリアン社会における歴史性を継承するにはあいまいな立場にいる「在日コリアン」も存在している。さらに日本以外の国で生まれ育ち日本へ移住してきた「在日コリアン」や日本で生まれ育ったが、海外に移住した「在日コリアン」もいる。このように極めて多様な生を生きる個々人の中には目に見える形での「実践」、自らのエスニシティを掲げアクティブに動くわけでもなく、在日コリアンという集団への帰属を自己アイデンティティの中心部に据えるわけでもなく、また、日本社会において差別や抑圧をされてきた「民族」的な歴史を全面的に受け入れ、引き受けるわけでもないが、「コリアン」であることに愛着を持っている人々もいるのである。彼らのエスニシティの語りはストーリー化しづらい。また、インタビューの中でもエスニシティについての言及より自らの目の前の人生についての語りの分量のほうが多い。それでも、語り手はエスニシティについて全く語る言葉を持っていないというわけでもない。このようなかすかなエスニシティというカテゴリーを用いた実践が目の前の人生で精一杯な個人の生の中でどのように営まれているのかを社会的な状況やライフステージなどの時間軸とともに描き出すことが必要であると筆者は考えている。

このような視点から、多様化する社会の中で多様化する在日コリアンの生を描くということは、社会それ自体を描き出す試みでもある。これらの課題を乗り越えていくためには、どのような視点が必要なのであろうか、次節では、ロジャース・ブルーベイカーのエスニシティの認知的視座という分析視角を援用しつつ、研究者による「在日コリアン」という分析カテゴリーをいったん括弧にくくり、当事者のカテゴリー実践やそれらが行われるプロセスを明らかにするための分析視角について検討をしていく。

#### 4. 個人のエスニシティ実践を分析する—ロジャース・ブルーベイカーによる認知的視座

個人を出発点としつつ、そこからエスニシティについて考えていくためにはどのような分析視角が必要なのであろうか。個人に注目するとはいえ、個人もまた社会の中に生きる存在である。物理的な場所の移動や、社会移動は個人に大きな変化をもたらす。法的地位の変化や、周りとの関係の作り方、そして自分自身を説明し、自分の中の社会的な立ち位置を理解する方法もまた、変化をしているはずである。

このような背景を考えると、在日コリアンとしても生きている一人の個人の生活の中で、どのような状況にあるときに自分自身のエスニシティが前景化するのか、どのような出来事がエスニシティと結びつけられて理解されるのか、そしてそうではないのかを検討する必要がある。

本節においては、ロジャース・ブルーベイカーの議論をみていく。ブルーベイカーはエスニシティの認知的視座を提唱した。エスニシティそれ自体は、「集団性」を前提に議論されることが多い。ブルーベイカーはこのような「集団性」を批判し、エスニシティ、人種、ネーションを世界のなかの物事 (a things in the world) なのではなく、世界についての見方 (a perspective on the world) なのだ (Brubaker 2006 = 2016:236) と強調する。つまりエスニシティ、人種、ネーションは特定の行動を行ったり、解釈をしたりする人々にとってのカテゴリーの実践であり、世界をどのように見るかという実践であり、それこそが研究の対象になるものであるというのである。

ブルーベイカーの視点から見ると、「在日コリアン」という実体を持った固有の集団が社会の中に存在するわけではない。それは、あるカテゴリーでありそのカテゴリーは個人々人によりさまざまに解釈され、現象として社会にたちあられるものであるということになる。カテゴリーは私たちにとっての世界を構造化し、秩序付ける。私たちは、カテゴリーを用いて、経験の流れを識別可能で解釈可能な物体、属性、事件などへと分節化するのである (Brubaker 2006 = 2016:246)。つまり、エスニシティはそれぞれの社会の文脈に依存しつつ個人によって実践されるものということができる。また、それは個人同士の相互行為の中で実践され

るものでもある。それは、社会のなかで私が私であることという自己の感覚に重要な意味をあたえながら、日常の中の様々な立ち位置によって変化し、意味づけられていく動的なものであるということが出来る。

ただし、エスニシティは当事者にとってはあくまで原初的なもの、家族とのつながりや歴史、血統によるものであり、固有の文化や固有の言語を持つものであると感じられるものでもあるということに留意が必要である。このような個人の中における心的過程について、ブルーベイカーは当事者の原初主義として認めている。そして、彼は研究者が用いる「分析カテゴリー」と当事者たちの日常生活の中で実践される「実践カテゴリー」を明確に分けて考えるべきだと主張する。当事者がエスニシティをどのように理解しているか、そしてそれがどのように作用しているのかという部分こそがブルーベイカーが分析の対象としているものである。ブルーベイカーは実践カテゴリーがいかに作用しているのかを分析するためには大きく二つのアプローチがあると述べている。以下、この二つのアプローチについてまとめた佐藤成基（2016）の解説論文を引用する。

エスニシティやネーションに関するカテゴリーはいかに形成され、いかに作用するのか。ブルーベイカーはその過程について、大きく二つの方向からのアプローチをあげている。

一つは「上から」のアプローチである。これは公式のカテゴリー化の実践、すなわち統治機構のなかに埋め込まれ、統治実践の中でルーティーン化される過程についての解明である。（中略）さらにそのような「上から」の公式のカテゴリー化が、一般の人々の自己理解や社会的組織化、政治的主張などにどのような影響を与えているのかも解明される必要がある。もう一つは「下から」のアプローチ、すなわちインフォーマルな日常実践に向けられたものである。それは、エスニシティが他者の行動を予期するための材料として用いられ、ステレオタイプとなり、自分（たち）や他者（たち）の行動を説明し、存在を意味付けられるために用いられ、さらには感情的連想の素材や価値判断の根拠として用いられる過程についての解明に向けられる。（佐藤 2016:322）

この視座は、在日コリアン当事者にしばしば感じられる「経験のない『民族』」（井上 2016）という状況をエスニシティの実践として解明するための分析枠組みとして有効であるといえる。経験のない「民族」を生きるということは在日コリアンが自らのエスニシティに関連づいたエピソードを語るときに、自らがリアリティをもって準拠できるようなあるべき在日コリアンの姿が不在、あるいは希薄なものになっている中で、日常の生活世界の様々な場面での経験を在日コリアンとしての経験として解釈し、意味づけているということである。

在日コリアンの民族組織や運動体はそのアクティビズムの中で日本社会の中に

において否定的なものとして差別や排除の対象となってきた自らのイメージを転覆し、日本社会で生きていくための権利を獲得するためにアイデンティティポリティクスを展開してきた。しかし近年、在日コリアンの集住地の解体や「日本人」との婚姻関係によって生まれた子供たちの増加、日本国籍を取得した在日コリアンの増加などにより、かつてのアイデンティティポリティクスが求心力を失いつつある。そのような状況の中でも、在日コリアンについてのあるべき姿についての言説は親からの継承や本、学校の授業などを通じ彼らに影響を与え続けている。ゆえに、在日コリアンのエスニシティについて当事者が語る時、あるべき民族像と自らの経験のちがいや、違和感などが表明されることがある。筆者が調査中に耳にした「意識高い系在日」という言葉や「私はあまり在日っぽくない」などの言葉は、個人のエスニシティ実践の在り方に社会的要因が影響を与えていることを表している。

このような状況を考えると、在日コリアンのエスニシティがどのように実践されているのかを明らかにしようとするとき、あるべき在日コリアン像がどのように提示され、どのようなシチュエーションでそれが強まったり弱まったり、受け入れられたり拒否されたりするのかをブルーベーカーのいう「上から」「下から」双方から検討し、分析する必要があるといえる。このように分析することにより、先にレビューをした研究ではとらえきれなかった個人の生活の中におけるエスニシティの実践のされ方—エスニシティがさほど意味を持たない状況も含め—を描き出すことができるようになる。さらに、「上から」「下から」双方のアプローチをとることにより、彼らが生きる社会的世界でのエスニシティの実践のされ方の変化（あるいは変わらなさ）を社会的な文脈でとらえることが可能となる。それは、自分自身をある社会の中でどう見せるかという相互行為上の戦略ではなく、彼らが世界をどのように見るかという世界の見え方の枠組みの変化を描き出すということでもある。

## 5. おわりに

本稿では、在日コリアンのエスニシティについて考えるとき、個人に注目する有用性とその分析視角についてレビュー、検討してきた。個人のカテゴリーの実践に注目することにより、個人がどのような社会に所属し、その社会においてはエスニシティがどのような意味を持ち、どのような時に彼らのエスニシティが顕現性をもつのかを議論することが可能になる。在日コリアンという共通の文化や歴史を共有する共同体についての研究やアイデンティティポリティクスにより主張される集団としての在日の姿ではなく、いま・ここに生きる一人の個人がどのようにエスニシティを実践するのかを描き出すことにより、社会とエスニシティの関係性に迫ることができる。また、個人の経験に焦点をあてることにより、この社会に生きる彼らにとって切実なこと、大切なことをエスニシティの枠組みで

は語りえないことをも含めて記述することが可能になる。このようなアプローチをとることにより、個人を取り巻く社会的環境が一個人の生き方やエスニシティにどのような影響を与え、そしてエスニシティがどのように作用したりしなかったりするののかというプロセスや状況を社会的な要因とともに記述することができるようになるのである。

イギリスの社会学者であるレス・バックは社会学者はもっと耳を傾け気付かれないものに気付くこと。自明のことを根拠づけること。もっとも小さな物語の中にある問題をより大きな、世界的な規模の問題へと結びつけること (Back 2007 = 2014: 54) が必要であると主張する。また、グローバル社会学の射程とは、私たちの最も身近な経験が、地球規模のネットワークや関係性の中に巻き込まれているということに関心を向けることである。社会学的に耳を傾けることが今日必要なのは、それが、排除される人々、見過ごされる人々を受け容れること、すなわち「場違い」だとされる人々に所属の感覚を与えることを目指すからである。(Back 2007 = 2014: 55) と述べている。

在日コリアンと呼ばれる人たちは、「在日コリアン」としても生きている存在である。日常生活における多くの場合、彼らにとって重要なのはエスニシティではないだろう。しかし、エスニシティはそれでもなお重要な意味をもってあるきっかけとともに前景化するものでもある。このようなプロセスを個人の生から出発し丁寧に描き出すことにより、エスニシティというカテゴリーの作用の仕方とそのプロセスを明らかにすることができる。そして、既存の在日コリアン研究が対象にしてこなかった移動する「在日コリアン」、つまり、必ずしもその生活の基盤や自己理解の基盤を日本に置いていない個人の生についても上記の視点から分析することによって、カテゴリー実践と社会の関連性という視点から分析することが可能になる。

#### [参考文献]

- Brubaker, Rogers. 2006. *Ethnicity without Groups*. Harvard University Press.
- Brubaker, Rogers, 2016, 『グローバル化する世界と「帰属の政治」移民・シティズンシップ・国民国家』佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳、明石書店。
- Back, Les, 2007, *THE ART OF LISTENING*. Berg. (= 2014, 有元健訳『耳を傾ける技術』せりか書房。)
- 井上恵子, 2016, 「経験のない『民族』を生きるということ—在日コリアン青年の語りから読み解くエスニシティ」, 『日本オーラルヒストリー研究』第12号, 191-205.
- 川端浩平, 2013, 『ジモトを歩く 身近な世界のエスノグラフィ』御茶の水書房。
- 李洪章, 2016, 『在日朝鮮人という民族経験 個人に立脚した共同性の再考へ』生活書院。

佐藤成基, 2016, 「グローバル化する世界において『ネーション』を再考するーロジャース・ブルーベイカーのネーション中心的アプローチについて」  
Brubaker, Rogers, 2016, 『グローバル化する世界と「帰属の政治」移民・シティズンシップ・国民国家』佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳, 明石書店, 303-341.

佐藤成基, 2017, 「カテゴリーとしての人種, エスニシティ, ネーションーロジャース・ブルーベイカーの認知的アプローチについて」, 『社会志林』第64巻, 第1号:27-48.

---

<sup>1</sup> 本論文では鍵括弧つきの「在日コリアン」はカテゴリーとしての在日コリアンを特に強調する意味で用いている。